

静岡県知事賞

ドヤ顔リレー

浜松市立気賀小学校 六年

石野 いしの 綾乃 あやの



「じいじ、また自まんしてるよ」家族の誰かが言うと、みんなが笑う。もちろん本人も笑っている。けれど、その顔はやっぱりちよつと得意げだ。

私の祖父は、元・市役所職員。今は地域のコミュニティセンターの館長をしている。でも、ただの館長じゃない。春には捨てられそうだったひな人形を集めて「ひなまつりイベント」、夏はかき氷冬はたい焼き。野菜や果物をもらえば「○○祭り」にしてしまう。広報で紹介して、野菜や果物をくれた

農家さんにも感謝を届ける。草がのびれば草かり、木がじゃまならチェーンソーまで出動する。子どもたちと一緒に作業をしながらおやつを焼いて配る。もはや「館長」というより、まちの人気者で、ちよつと変わったヒーローだ。

そんな祖父の口ぐせは「あ！またいいこと思いついちゃった！」でも、いつもドヤ顔で自分から話すから、私は「すごいね」と素直に言えない。でも、本当はずつと思っていた。「かっこいいな」「私も、じいじみたいになりたいな」と。

ある日、学校で子ども食堂の話聞いた私は、つい祖父に話してしまった。「うちの町にもできたんだって。」すると祖父の目がキラッと光った。「へえ、それ、いいな。あれをこうしたら：いや、できるな。」それから数日後、祖父は本当に企画し、走り出していた。

「夏休みにやるから綾乃もおいで。」

私はびっくりした。思いついただけでなく、本当にすぐに始めてしまうのだ。私は、そんな祖父がまぶしくて、正直ちょっとだけやさしかった。私はまだ何もしていない。ただの「いいなあ」で終わっていた。

その日の帰り道、私はゴミを拾ってみた。誰かに言うほどでもない。気づく人もいない。だけど、祖父のように「自分から動く」ことを、私もやってみたかったから。拾ったあとの手のひらに、ちょっとだけ勇気が残った。それから私は、毎週土曜日の朝に近所を歩いてゴミ拾いをするようになった。いつもより少しだけ静かな時間。でも、道がきれいになるたびに、心の中で「ふふん」と笑いたくなる。私もちょっとだけ、ドヤ顔したくなるのだ。祖父に「ゴミ拾い、やってるんだ」と言ったら、「おお、いいじゃん！おれ、そういうの大好き！」と満面の笑みで言った。そのとき私は思った。「ああ、親切ってリレーみたいだな」と。

しょう来の夢は、まだ決まっていない。でも私は、誰かの役に立って、その人が笑ってくれたらうれしい、と思うようになった。祖父がくれた親切のバトン、今度は私の番だ。私もいつか、誰かにドヤ顔でバトンをわたせるように走り出したい。



静岡県知事賞

日頃の親切に感謝を

静岡市立城内中学校 三年

あおしま
青島
なごみ
和



ミンミンミン。今年もセミの声によってより苦しく感じる夏の暑さが、私の体を疲れさせる。そんなとき、ふと思った。「またトマトジュースが飲みたい」

小学生の頃の夏休み、私は毎年姉と妹と友達と一緒に書道教室へ通っていた。耐えられないほどの暑さだったにもかかわらず、私たちは速足で教室へ向かっていた。教室へ行くまでの道で、年配の方が経営している電気屋さんがあった。そのおじいさんはいつも、私たちに会うと団扇をくれた。そ

して、冷房のきいた店内に入らせてくれて、トマトジュースを飲ませてくれた。当時、私は酸味が強いトマトジュースが少し苦手だったけど、おじいさんの優しい気もちをありがたく頂戴した。その電気屋さんに飾られている書き初めの作品は、自分の孫が書いたものだとおじいさんは誇らしげに語っていた。それから、涼ませてもらっている時間、いつもおじいさんといろいろな話をした。おじいさんのお孫さんの話や私たちの祖父母の話、私たちが通っている書道教室の話。つ

い時間を忘れてしまうほど、たくさんのことを話した。それは本当に楽しい時間だった。

中学生になり、勉強や部活で忙しく書道教室へ行くことが少なくなり、おじいさんに会わない日が続いていた。久しぶりにおじいさんに会いたいと思い、冬休みに小学校の頃のメンバーで電気屋さんを訪ねると、もうおじいさんの姿はなかった。おじいさんの妻であるおばあさんの顔は前よりやつれていて、顔色が悪かった。

「おじいさんは、つい最近亡くなっちゃったんだよ。あなたが来るたび、幸せそうにしていたよ。ありがとう。」

おばあさんは目に涙を浮かべてそう言った。私は、おじいさんの優しい笑顔を思い出し、とても後悔した。もっとおじいさんに会いに行けばよかった。そして、おじいさんの優しさや私たちにしてくれた親切に感謝すればよかった。

誰かがしてくれる小さな親切は、当たり前前にあるものではない。親切にする本人にとっては、当たり前前にできるかもしれないが、それを当たり前前に受けとってはいけない。受けとる人は、感謝をするべきである。こんな大事なことに、私はおじいさんを失ってから気づいたのだ。苦手だったトマトジュースもおじいさんとの思い出深い味に変わった。

大切な人を失ってから「もっとその人に感謝すればよかつ

た」と後悔しないよう、日頃から自分にくれた親切は当たり前前に受け取らず、感謝の意を伝えていきたい。そして、おじいさんがしていたように誰かを思いやる気もちを持つことを忘れず、小さな親切を当たり前前にできる大人になりたい。

